

# 実践・臨床のためにソーシャルワーク概念の検討

— “個人と環境”ではなく“その個人のその行動と環境”の相互作用に着目して—

Considering of concept of Social Work for practice

○渡辺修宏 (Watanabe Nobuhiro)

国際医療福祉大学 (International University of Health and Welfare)

Key words: Social Work (ソーシャルワーク), 実践概念, 行動分析学

## 目的

Social Work (以下、ソーシャルワーク)とは何か?それは、Richmond や Butrym の言葉を借りるまでもなく、なんらかの援助を必要とする対象を救う術や過程のことと広く知られているだろう。あるいは、個人とその個人を取り巻く環境との相互作用であり、それへの評価や操作であると、理解される人も少なくないだろう。いずれにせよ、しかるべき援助の対象者 (以下、クライアント) に対するなんらかの具体的な実践であることは間違いない。

2014 年に International Federation of Social Workers および International Association of Schools of Social Work が採択した定義によれば、ソーシャルワークとは、「社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問」となる。加えて、「社会正義、人権、集団責任、および多様性尊重の諸原理」がソーシャルワークの「中核」であり、「(多様な) ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知」がソーシャルワークの「基盤」となることが示されている。他にも、「任務」や「原則」などについて述べられている。

上で述べた定義によって、ソーシャルワークの対象、展開される場面、方向性についての理解が整理された。しかしその一方で、“つまるところ、ソーシャルワークとは何か”に対する、本質的な疑義が残されている。例えば、上述の定義では、ソーシャルワークが「実践に基づいた専門職であり学問」となっている。ソーシャルワークとは「専門職」であり、「学問」であるのか、と疑義を唱えることも可能である。ただこれに関しては、その2つの要素は、「社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する実践」によって具現化される象徴と理解することが可能である。よって、やはりソーシャルワークはあくまで、しかるべき「実践」であると主張できる。

では、そのソーシャルワークと言える「実践」とは何か?実は、その実践概念を明らかにしようとする、曖昧さとの直面が不可避となる。ソーシャルワークの国際定義では、中核概念や基盤を示す用語における抽象性が高いからである。また、マクロ、メゾ、ミクロのような多様な次元にとらわれない定義として、ソーシャルワークが論じられているためかもしれない。そこで本研究は、ソーシャルワークの国際定義を踏まえた上で、ソーシャルワークの実践概念について検討したい。

## 方法

先に述べたように、ソーシャルワークの定義、すなわち、その実践概念に関わる課題は、いわゆる抽象概念である、「社会変革、

社会開発、社会的結束、エンパワメントと解放の促進、あるいは、「社会正義、人権、集団責任、および多様性尊重」が多数用いられていることと関係している。抽象的要素が多ければ多いほど、具体化、実体化しにくくなるからである。すなわち、世界各地のさまざまなソーシャルワーク実践場面において、それらの抽象概念がどのように規定されるのか、あるいは、どのような現象をそれとして捉えるのが曖昧であるため、実践概念を規定し難いと考えられる。

もちろん、各地における文化、宗教、歴史など、すなわち、「地域・民族固有の知」を踏まえて柔軟に運用できるようにするための配慮は重要である。その意味で、抽象概念は、多様性を尊重するための重要な捉え方であるといえる。

では、抽象概念の必要性を踏まえつつも、実践概念を捉えることはできないのであろうか。本研究はそのような問題意識から、理論と実践を一元的に捉える行動分析学の知見を援用することとする。行動分析学は、徹底的行動主義を哲学的基盤とする理論であり、また、技術でもある。特に Human service などの臨床においては、応用行動分析学という応用科学領域として、国内外で広く研究がすすめられている。本研究はこの理論と技術の知見に基づいて、ソーシャルワークの実践概念について考察する。

## 結果と考察

行動分析学に基づけば、ソーシャルワークは、それを必要とするクライアントと、そのクライアントを取り巻く環境 (ここに援助者も含まれる) との相互作用として、規定される。より正確に描写するならば、そのクライアントの特定の行動と、その行動を取り巻く環境の相互作用という実態 (現象) として、捉えるのである。すなわち、「有機体ならばなんらかの反応を示す (有する)」という“行動”と、その行動の生起・増減・消失に影響を及ぼす環境変数の組み合わせ (過程) を評価し、必要に応じてその組み合わせを操作する一連の手続きが、ソーシャルワークの実践概念となるのである。そしてここで登場する (クライアントらの) 「行動」が、その生起数、生起率、潜時、持続時間、強度、生起傾向といった次元において、「地域・民族固有の知」と記されるその多様性を具現化するのである。

行動分析学に基づくことによって、ソーシャルワークを抽象概念としてまた実践概念としても一元的に定義することができた。このような理解によって、ソーシャルワークをマクロ・メゾ・ミクロといった多様な次元にとらわれず一元的な理論と方法で語れるようになるかもしれない。ただし、行動分析学上における「行動」や「環境」の定義は、日常用語としてのそれと異なるため、正しく理論を身につけていないと誤用する可能性がある。